

$^{99m}\text{Tc}$  シンチグラフィを行い、その後摘出し組織診断の得られた耳下腺腫瘍 40 症例 43 病変とし、耳下腺腫瘍に対するレモン負荷前後の  $^{99m}\text{Tc}$  シンチグラフィの異常集積の有無と、Warthin 腫瘍でのレモン負荷後  $^{99m}\text{Tc}$  シンチグラフィの異常集積の強さと病理像との対比を検討した。

$^{99m}\text{Tc}$  シンチグラフィは Warthin 腫瘍にのみ異常集積を認め、レモン負荷前後では負荷後のほうがより描出が可能になった。またレモン負荷後  $^{99m}\text{Tc}$  シンチグラフィの異常集積の強さは好酸性上皮細胞の占める割合、腫瘍の大きさを反映しており、腫瘍の大きさ、内部の性状を推測する上で有用と思われる。

## 9. Hepatopulmonary syndrome の 1 例

末吉 真 小川 洋二 林 邦昭  
(長崎大・放)  
大野 康治 東 尚 兼松 隆之  
(同・二外)

慢性肝疾患に肺胞気・動脈血酸素分圧較差の増大、肺動静脈シャントを合併した hepatopulmonary syndrome の 1 例を報告する。症例は 6 歳女児。先天性胆道閉鎖症にて生後 3 か月で手術が施行され、5 歳から低酸素血症が増悪傾向となった。肺血流シンチグラムにて腎や脳が明瞭に描出され、肺動静脈シャントと診断された。全身と肺のカウント比から算出したシャント率は 32% であった。その後、生体肝移植が施行された。肝移植後、低酸素血症は改善し、37 日目に行われた肺血流シンチグラムでは腎や脳への集積は不明瞭となり、肺動静脈シャントの改善が核医学的に診断された。肺血流シンチグラムは本疾患の診断・経過観察に有用であった。

## 10. 化学療法後、肺門・縦隔部に一過性のガリウム高集積を認めた中咽頭悪性リンパ腫の 1 例

吉開 友則 舩本 博史 徳丸 直郎  
三原 信 工藤 祥 (佐賀医大・放)  
進 武幹 (同・耳鼻)

症例は 78 歳男性。左中咽頭の悪性リンパ腫の診断のもと、当院耳鼻科にて CHOP 療法を 2 クール施行された。治療前のガリウムシンチグラフィでは左中咽頭の腫瘤にのみ異常集積を認めた。治療終了後 6 日

目に行ったガリウムシンチグラフィでは、左中咽頭の異常集積は認められなくなっていたが、肺門・縦隔部に著明な高集積が出現していた。再発を疑い施行された胸部 CT では、明らかな肺門・縦隔リンパ節の腫大はみられなかった。その後、治療は行わず経過観察されたが、10 か月後再検したガリウムシンチグラフィでは肺門・縦隔の異常集積は消失していた。以上より、再発ではなく、化学療法が原因となった一過性のガリウム集積亢進と推測された。化学療法後のガリウムシンチグラフィの読影の際に留意すべき所見と思われたので報告した。

## 11. 高カルシウム血症における $^{99m}\text{Tc}$ -HMDP 骨シンチグラフィのびまん性肺集積

丸岡 公生 吉良 朋広 横山 利美  
西 潤子 富口 静二 高橋 睦正  
(熊本大・放)

悪性腫瘍に続発した高カルシウム血症の患者に施行した  $^{99m}\text{Tc}$ -HMDP 骨シンチグラフィで認められたびまん性肺集積の 2 例を報告する。症例は 42 歳女性と 69 歳男性。基礎疾患として悪性黒色腫と大腸癌があった。両者とも骨シンチグラフィで肺にびまん性集積を認め 1 例は胃にも集積を認めた。胸部単純 X 線写真で 1 例では異常を認めず、集積の強い 1 例ではびまん性陰影を認めた。骨シンチグラフィにより肺野への Ca の集積は胸部単純撮影により早期に診断でき、2 例共に死亡していることより予後不良を示唆する所見と考えられた。

## 12. TEW 収集機能のない 3 検出器型 SPECT 装置による TEW 法を用いた散乱線の補正法に関する検討

長町 茂樹 陣之内正史 大西 隆  
田村 正三 (宮崎医大・放)  
前野 正和 (同・一内)

TEW 法を TEW 収集機能のない 3 検出器型 SPECT 装置に応用するため、TEW 法で用いられる 3 つのエネルギーウィンドウのうち、メインウィンドウの両側に設定した 2 つのサブウィンドウのデータを合算収集して散乱線補正を行う方法を考案した。本法により  $^{99m}\text{Tc}$  および  $^{201}\text{Tl}$  単核種投与の場合における定量

性の改善の有無， $^{99m}\text{Tc}$  と  $^{201}\text{Tl}$  の 2 核種同時投与を行った場合の 2 核種分離の精度をファントムを用いて SPECT 収集を行い，散乱線補正を行った場合と行わない場合で比較検討した．本法を用いることで画

質，定量的精度は改善したが， $^{99m}\text{Tc}$  と  $^{201}\text{Tl}$  の分離については不十分であり今後検討の余地があると思われる．